

前世を記憶する子どもたち 1990 日本教文社

イアン・スティーヴンソン

1943年マギル大学医学部卒業後、コーネル医科大学にて心身医学、ワシントン精神分析研究所等で精神分析の研鑽をそれぞれ積み、1949年よりリルイジアナ州立大学医学部助教授、1957年よりバージニア大学医学部精神科主任教授となる。

1967年より、死後生存を中心とする心霊研究の調査を専門として現在に至る。1968年同大学医学部に超心理学研究室(1987年に人格研究室と改称)を設立し、1968年および1980年に超心理学会会長を務める。

生まれ変わり型事例に頻繁に見られるいくつかの特徴

完全型の事例には、大きな特徴が五つある。まず、ひとりの(ふつうは年輩の)人物が、(自分の死後に)もう一度この世に生まれ出るという予言をするところから始まる。その人物は、どの両親のもとに、あるいはどの場所に生まれたいとまで明言することも少なくない。その後本人が死亡し、次いで誰かが——必ずしも遺族とは限らないが——ある家族のもとに本人が生まれ変わる夢を見る。その子どもが生まれると、故人の体にも付いていた傷などの目印と一致する母斑(あるいは先天的欠損)がその子どもの体にもあることがわかる。その子どもは、口を利くようになるとまもなく、その故人の生涯を(初めは断片的に、次第に詳細に)物語るようになる。またその子どもは、自分の家族の中では変わっているが、その故人が示した、ないしは示したと思われる行動とは(情報提供者によれば)符号する行動を見せる。

以上のように、完全型の事例には、もう一度生まれ変わるという予言が行なわれ、誰かがその夢を見て、生まれて来た子どもに母斑や先天的損失があり、子どもが前世について物語り、それと平行して変わった行動を示す、という特徴がある。とはいっても、五つの特徴をすべて持った事例はほとんどない。生まれ変わりを明確に予言する例は稀であるし、その他の特徴が三、四点見られる場合でも、一部の要素が他のものと比べてはるかに目立つこともある。次に、以下五通りの特徴をひとつずつ検討してみよう。

(1)死ぬ前に生まれ変わりの予言をする

先述のように、生まれ変わる場所を明確に予言する例は、こうした事例が見られる大半の文化圏でも稀である。しかしながら、チベット人と北アメリカ北西部に居住するトリンギット族というふたつの民族では、この種の事例がかなりの頻度で見られる。トリンギット族では、前世の人格が生前に、来世の両親を特定している事例は、46例中10例(22パーセント)にのぼっている。

トリンギット族の中には、来世ではもっと健康になりたいとか、容姿をもっとよくしたいという願望を表明する者も多い。このよう抱負は、予言というよりは希望という形を取ることもあるが、前世で表明した願望が現世で実現されたように思われる事例も少数ながらある。またトリンギット族の中には、自分の(現在の)体にある瘢痕その他の傷跡と一致する母斑を、来世の肉体にそのままの形で出現させるという予言を行

なう者も時おりある。そのような宣言をしておくことにより、自分が生まれ変わった時に確認してもらいやすいようにするのである。

他の文化圏で生まれ変わりの予言が行なわれる場合には、年輩の人物が自分の家族内にもう一度生まれて来ると言う例が多いようである。私は、トルコとインドでこの種の事例を多数調査している。トルコでもインドでも、同一家族内に生まれ変わったとされる例は珍しい。しかし、子どもが、先祖の誰かの生涯を記憶している場合、その先祖は生前、その家族の中に生まれ変わって来ると予言していることが少なくないのである。

(2)予言夢

前世の記憶を持って生まれることになる子どもの関係者が、自分の前に死者が現われ、生まれ変わりたいという願望や意志を表明する夢を見る事例は少なくない。そういう夢を見るのはたいていが既婚女性であり、その後生まれ変わって来る子どもの母親になる女性であるのがふつうである。時には、その女性の夫その他の親族や友人がこうした夢を見ることもある。私はこの種の夢を“予告夢”と呼んでいる。若干の例外はあるが、本人が生まれる前に、時にはその子どもを受胎する以前に起こるからである。第四章で要約して紹介した12例中5例で、このような夢が観察されている。

予告夢は、生まれ変わり型事例が見つかるすべての国で報告されてきた。とはいえ、ビルマ人やトルコのアレヴィス族や北アメリカ北西部の諸部族の間に比較的多く見られる。

ビルマでは、こうした夢を見るのは、前世の記憶を持って生まれて来る子どもを身ごもる前が多いのに対して、北アメリカの北西部に住む諸部族の場合には、ほとんどが臨月に入った後であり、特に出産の二、三日前ないし二、三時間前から出産するまでの間が多い。

また、この種の夢はさまざまな形をとる。トリンギット族では、予告夢の中に現れる肉体を持たない人格が、生まれ変わりの意志を象徴的に伝える場合が多い。たとえば、夢の中でその人物がスーツケースを持って家の中に入って来て、それを寝室に置くとか、両親の寝室に入り、ふたりの間に寝るなどがある。それに対してビルマの夢では、肉体のない人格が、自分で選んだ家族の一員として生まれ変わりたいと懇願するものが多い。この点から判断すると、夢を見ている者にはそうした願いをはねつける自由があるらしい。

こうした夢に付随して、おもしろい現象が起こる場合がある。あるビルマ女性は、夫が長旅で家を留守にしている時、今は亡き友人が本人の子どもとして生まれ変わらせてほしいと頼み込んでいるような夢を見た。この女性は、その申し出を快く思わず、(夢の中で)うちには来ないでちょうどいい、と拒絶した。旅先から帰った夫は、やはり今は亡き友人の夢を見ていたが、(自分の夢の中で)その友人に、君がうちの一員として生まれ変わるなら喜んで迎えよう、と言っておいたことを話した。やがて子ども(マウン・アウン・タン)が生まれたが、その子どもは後に、母親には拒否されたが、父親には受け入れてくれる気持ちが強かったことを匂わせる発言をしている。それでも、母親は、ビルマ人特有の陽気さでこうした状況を受け止めた。

(3)母斑や先天的欠損

前世の記憶を持つとされる子どもの中には、情報提供者の証言をはじめとする証拠によれば、前世の人格の肉体に付いていた傷(その他の目印)と符号する母斑や先天的欠損を持って生まれて来る者が多い。また、一部には、本人の持っている疾患が、前世の人格が持っていたものと一致する場合もある。

既にこの世にいない人間の身体検査はできないので、このような事例では、故人の肉体に付いていた傷跡その他目印となるものの位置については、主として遺族や友人の記憶に頼らざるをえない。また、このような情報提供者は、たいてい、記憶を持つ子どもの体に見られる母斑の部位を承知しているので、前世の人格の体にあった傷跡の記憶を、子どもの母斑の部位や形状と一致させたいという誘惑が生ずるかもしれない。(そういうことはなかったと私が確信している場合でも、そのような歪曲があったのではないかと批判する者が現れる可能性は残ると思う。)

私は、子どもの記憶と符号する故人の検死所見その他の、傷跡に関する医学的記録入手することにより、この難点を克服した事例を30例ほど持っている。この種の報告書は、前世の記憶を持つ子どもの体に見られる母斑のことは全く知らない状況で、しかもその子どもが生まれる以前に書かれたものであるのは明らかである。また、この種の医学的記録によって、こうした事例の情報提供者から既に得ている、記憶に基づく証言の事実性が(若干の例外はあるものの)確証されているので、情報提供者から得た証言に対して私が一般に信頼を置いているのはまちがっていないと言える。

前世の人格に関する母斑や先天的欠損は、生まれ変わりという考え方がこうした事例の最善の説明になることを裏付ける最有力の証拠であるように私には思われる。この種の証拠は客観的に観察できる(私はこれまで、この種の事例数100例の写真を撮影している)し、生まれ変わりという考え方以外でその大半に当てはまりそうな(私に考えられる)解釈としては、その赤ん坊の母親が、胎児の体に超常的な方法により影響を与えたとするものしかない。ところが、生まれ変わりという考え方と同じくらい(平均的西洋人には)途方もないこの説明も、その子どもの両親が、後で突き止められることになる前世の人格については本人が生まれるまで全く知らなかつた12例ほどでは、完全に棄却できるのである。

こうした事例に見られる母斑や先天的欠損は、超常的な力が人間の肉体の発育過程に影響を及ぼしうることをうかがわせてくれる、という意味でも重要である。母斑や先天的欠損には(生まれ変わりの証拠および超常的な力が人体に作用する証拠として)このように二重の重要性が存在することから私は、現在執筆中の著書の中で、こうした特徴を持つ多数の事例を報告したいと思うようになった。この著書はまだ出版されていないので、母斑や先天的欠損を持つ事例について本書の中でこれ以上論ずるのはあまり適当ではなかろう。

(4)前世に関する子どもの発言

本節では、子どもが前世について話す年齢や話しぶり、さらには子どもの発言内容に共通して見られるテーマについて論ずるつもりである。又、前世の人格がよく承知し

ていた人物や物品を子どもが見分けるとされることについても、簡単に触れる予定である。

(5)前世について話す年齢および話し方

前世の記憶を持つ子どもが初めてその話をするのは、二歳から五歳までの間がほとんどである。一部の事例で言われるように、もっと幼い子どもが前世のイメージ記憶を持っているとしても、ほとんどの場合、言いたいことを表現する言葉がまだ使えない。それでも一部には、心に内在するイメージを的確に伝える言語能力が出現する以前に、前世の話を始める子どももある。

それほどの早期に話し始める子どもの場合には、発音をまちがえたり、乏しい語彙を身ぶりで補ったりすることが多い。困惑した両親の(子どもの側から見れば)乏しい理解力では、子どもの言っていることがわかるまでに一年以上かかるかもしれないが、子どもの言語が次第に発達するおかげで、本人が描き出そうとする前世の全体像は次第に明確になってくる。いくつかの実例を紹介すれば、どれほど早期に子どもたちが自らの記憶を周囲に伝え始めるものかがおわかりいただけよう。レバノンのイマド・エラワールは、自分の記憶に残っている前世時代に二連式の銃を持っていたことを話したがり、伸ばした二本の指で二本の銃身を表現しようとした。インドのクムクム・ヴェルマは、前世時代の息子の職業(鍛冶屋)を家族に話したがり、金槌で鉄床を叩く動作やふいごを使う動作を身ぶりでまねた。やはりインドのプシュバも、自分の夫が自転車の修理店を経営していたことを伝えたがり、あおむけになって、両脚で自転車のペダルを漕ぐまねをした。

共同研究者とともに私は、インドの235例を対象に分析を行なっているが、それによると、記憶に残っている前世について話し始める平均年齢は、三歳二ヶ月であることがわかった。前世について初めて話した平均年齢は、私たちが分析した他の五つの文化圏の事例と同じかそれに近かった。たとえば、アメリカの79例でも、やはり三歳二ヶ月だったのである。

もっと年長になるまで前世の記憶が出現しないか、記憶があってももっと長年になるまで人に話さない子ども若干ある。生まれ変わり信仰を持つ文化圏ですら、家族や友人にからかわれたり叱られたりするのを恐れ、記憶している事柄を口にしない子どももある。(スレイマン・アンダリがその一例である。)

本人が少年期後期や成人に達した後初めて前世を想い出したことがわかった場合、何らかの超常的要素が存在する証拠としては一般に意味がないと思う。とはいっても、成人に達した後、初めて筋の通った記憶が出て来たように見える者が一部にあるという事実は私も承知している。こうした事例の大多数では(第三章で説明しておいたように)、ゲオルク・ナイトハルトの事例のように心理的ショックを受けた後か、プラトムワン・インタヌやウッタラ・フダールの事例のように瞑想の最中やその後に、初めて記憶が出現しているのである。

本人の持っている記憶にどの程度の情報量が含まれるかは、事例ごとに相当の差がある。記憶している内容がきわめて限られている者もあれば、厖大な記憶を持つ者もある。デリーに住む少年は、前世記憶の最少記録保持者である。この少年によれば

自分はボンベイの生まれで、煙がいっぱい立ち込めた場所で人々が嘆き悲しんでいるのを覚えているというが、それ以上の記憶はないのである。(煙が立ち込めて人々が涙を流しているという言葉は、火葬の場面を表わすものなのかもしれないが、本当にそうなのかどうかは確認されていない。)逆に、記憶量がきわめて多い事例としては、エドワード・ライアルやマルタ・ロレンツ、スバルンラタ・ミシュラのような事例が挙げられる。エドワード・ライアルは、非常に詳細な記述をふんだんに盛り込んだ本を一冊書き上げているのである。不正確な部分も若干あるし、事実かどうか確認されていない点もあるが、ほとんどは正確である。ライアルは、一部の記憶について少年期後期に発現させたが、大半はそれよりはるか後に出て来たものである。本人は自分の記憶に基づいていると主張するが、それほど多くのしかも正確な知識をいったいどこから得たのか、という疑問は残る。しかしここで今問題にしているのは、その情報量自体なのである。マルタ・ロレンツ(ブラジルの事例)の父親は、幼少期に娘が前世について語った120項目の事柄を記録しておいた。ところが残念ながら、誰かがその記録を誤って捨ててしまったため、マルタが語った内容が正しく記録されているのは、結局全体の1/3以下になってしまった。スバルンラタ・ミシュラ(インド)について言えば、本人は前世の生活をほとんど想い出しているという。これはおそらく誇張であろうし、本当かどうかも確認されていないが、大半の子どもたちよりもはるかに記憶量が多かったのは確かである。残念ながら本例では、私自身が未熟だったため、本人の記憶を的確に記録したのはごく一部にすぎなかつた。

記憶量の多い事例は、現在考えられている以上に多いのかもしれない。残念ながら私たちは、前世の話をする最盛期に本人と対面できることはほとんどない。その後に初めて面会できた、という事例が多すぎるのであるが、その時には既に、細かい記憶がかなり失われてしまい、薄れつつある記憶の断片がかろうじて残っているか、場合によつては完全に消失してしまった後かもしれない。親たちの中にも、子どもが以前語った内容をかなり忘れてしまっている者がある。とはいえ、私が調査した大半の事例の提供者は、その子どもが前世について語った事柄を4、50項目ほど記憶していた。

(6)前世の記憶の中心にあるテーマ

子どもの記憶は、前世最後の日の近辺で起こった出来事の周辺に集中する傾向がある。前世の自分の死に様を覚えているという者が3/4近くあり、しかも、自然死の時よりも横死を遂げた時の方が、死の状況を記憶している比率が高い。

前世の人格の死に様や死の直前に起こった出来事の他にも、前世の人格がよく知っていたさまざまな人物や物品について想い出すこともある。その人物や物品と(死亡前の前世の人格と)の結び付きが新しいことは、結び付きの長さよりも重要な要因のように思われる。たとえばスクラ・グプタは、(前世の人格である)マナの結婚生活について細かい点をたくさん記憶していたが、結婚前の年月の大半を一緒に過ごした実家の家族についてはほとんど覚えていなかった。

前世を記憶する子どもたちは、前世の人格の名前や、家族や友人や仇敵の一部の名前を覚えているのがふつうである。前世の人格が殺害されている場合には、犯人の名前を

覚えている場合が多い。とはいえる、ここでもたくさんの変異がある。同じ文化圏内でも事例ごとに異なるが、そればかりではなく、文化圏ごとに見ても違いがあるのである。たとえば、インドやビルマやタイの事例では前世の人格の名前を覚えている者が多いため、スリランカや(北西部の諸部族を除く)北アメリカの事例の場合はそうではない。

スリランカに名前をあまり記憶していない事柄が多いのは、シンハラ族が日常生活であまり本名を使いたがらないためではないかと私は考えている。シンハラ族は相手を呼ぶ際、肩書や自分との間柄を本名の代わりに用いたがる傾向がある。記憶は反復によって強化されるので、前世の生活の中で本名を使わないと現世で本名が想い出しにくいという結果になるのではなかろうか。

しかしながら、アメリカの子どもにも(本名を)記憶していないという問題が見られることについては、別の説明をする必要がある。アメリカ人の場合には、日常生活の中で相手を呼ぶのに抵抗なく名前を用いるからである。これまでのところでは、この点について満足な説明はできていない。まず私は、前世の記憶を持つアメリカの子どもは他の文化圏の子どもと比べて、どの方面にせよ記憶が乏しいのではないかと考えた。つまり、アメリカ人の子どもが名前をあまり覚えていないのは、記憶が全般に乏しいためなのではないか、ということである。ところが、アメリカ人の子どもとインド人の子どもが前世について発言した項目の数を比較してみたところ、この推定は裏付けられなかった。とはいえる、事実であることが確認された項目に限ると、アメリカの子どもは、インドの子供ほど前世のことを話していないという事実がわかった。したがって、アメリカの子どもの発言には、記憶の空白を埋めるための空想が多い、という可能性がある。これも、さらに検討を要する問題のひとつである。

(7)人物や物品を見分ける

前世の記憶を持つ子どもの中には、誰かが前世時代の村や町に連れて行ってくれさえすれば、前世時代に知っていた人物と再会することができるし、その人たち(や場所)を見分けることができると主張する者も少なくない。前世の人格がよく知っていた人物や場所や物品を本人が見分けたという証言は、多くの事例に見られる。このようなことは、その子どもの両親が前世の家族のもとへ本人を連れて行った時や、子どもの話を聞きつけた前世の家族が本人に会いに来た時に起こるのがふつうである。

こうした事例の情報提供者は、子どもが人物や場所を見分けたことを、私よりもはるかに重視するが、こうした検分がある程度にせよ管理された条件の下で行なわれることはほとんどないのが実状である。子どもは、前世の家族と対面する際、必ずと言ってよいほど、新たにその家族の一員となった者から大群衆に至るまで、大勢の人間に取り囲まれる。その人たちが子どもに、「この中に奥さんがいるかな」などという誘導的な質問をする場合が多いうえに、取り巻いている人々が期待に胸をふくらませながら前世の人格の妻に注目しているため、子どもはまちがえようがなくなってしまうかもしれない。ある

とはいえる、子どもが次の二通りの状況で見分けることに成功した場合には信頼が置ける、ということについても述べておかなければならぬ。まずひとつは、たと

えば街を歩いている人など、たまたま出会った人物を自分から積極的に見分けた場合である。第四章で紹介しているコーリス・チョトキン・ジュニアは、このようにして、(その生涯を記憶している)ヴィクター・ヴィンセントの義娘を見分けている。この女性がアラスカ洲シトカの波止場にいた時、そこへコーリスがたまたま母親と一緒に来て いたのである。突然この女性に気づいたコーリスは、興奮しながら「うちのスージーがいる」と叫んだ。コーリスの母親は、スージーと知り合いであったが、コーリスの気づく方が早かったのである。このように本人が自発的に見分ける場合、証拠としての価値が最も高いのは、一緒にいる者には全くわからない人物を本人が言い当てる例である。アムパン・ペトチェラト(タイ)は、その生涯を記憶しているチュエイという少年の伯母(ジョイ・ルアン・ゲン)を、自分が住んでいる小さな町の通りで自分の方から見つけている。その時一緒にいたアムパンの母親は、それまでジョイ・ルアン・ゲンを全く知らなかった。トルコのイスマイル・アルティンキリヒも、自宅の道を通ったアイスクリーム売りのふたり連れを自分の方から認めている。このふたりは、そのあたりにアイスクリームを売りに来ているので、イスマイルの家族もおそらくは顔を知っていたのだろうが、ふたりの名前は知らなかった。ところがイスマイルは、その名前を言い当てているのである。この種の出来事は数があまりに少ないが、いずれにせよ、子どもの家族がそのような仕向けたという問題は起こりえない。もうひとつは、数はわずかであるが、信頼の置けるおとなが、うまく条件を整えて、子どもが知っている可能性のある人物を、人目のつかない静かな状況で本人と対面させ、「この人がわかるかい」という以上の聞き方をしていない場合である。スリランカのグナナティレカ・バデウィタナという少女は、(私の手によってではないが)初めて調査が行なわれた時、このような条件のもとで何人かの人物を見分けている。私はその場面を見てはいないが、その後グナナティレカがある人物を見分けた時など、同様に管理された条件下で見分けを行なった場面に数回立会っている。その時私は、グナナティレカの前世の人格だというティレケラトネという少年の友人を本人宅に連れて行く役割を受け持った。(本例も性転換が起こった事例である。)またその際私は、ティレケラトネが知らなかった人物も同行させた。この人たちを知っているかどうか聞かれると、即座にグナナティレカは、(たとえば、“ローラ”と言うべきところを“ドーラ”と言ったという程度の些細なまちがいはあったが)前世の人格の友人の名前を言い当てた。しかし、もうひとりについてはわからなかった。見分けることができた方の人物と知り合った場所を聞かれると、本人は、その町の名前(タラワケレ)を言った。その質問をされている時の状況から町名を推定した可能性もあるが、ティレケラトネの友人の名前についてはその可能性はないと思う。

(8)前世に関連する行動

前世を記憶する子どもは、自分の家族から見ると一風変わった二種類の行動の一方ないし双方を示すことが多い。

まず第一に、本人が持っているとする記憶に沿った感情を、前世の家族に対して示す子どもが存在することである。もし前世が幸せな一生であり、不幸だった時間の方が短ければ、子どもは、まだ存命中の前世の家族のところへ連れて行ってほしい、と求

めることもある。先方と対面すると本人は、喜びや懐旧の情や、あるいは逆に無関心や拒絶を示すかもしれない。このような反応はほとんどが、前世の人格と前世の家族の関係について判明した事柄や推測できる事柄ときわめてよく一致する。

ラタナ・ウォンソムバト(タイ)の事例は、前世の人格の家族に対して、本人が各人を区別して応対する好例である。ラタナは、前世の自分だというキム・ランという老婦人の娘であるアナン・スタヴィルと対面した時には大変に喜んだが、キム・ランの夫に対しては無関心を装い、後には敵意すら示した。キム・ランは、不和の続いた晩年には、夫とほとんど口を利かなかったのであった。グナナティレカ・バデウィタナが、その生涯を記憶している少年(ティレケラトネ)の家族に対して示した行動を見ても、同じように相手を識別しながら行動しているのがわかる。グナナティレカは、ティレケラトネの姉妹やある教師と非常に仲がよかったが、兄に対してはきわめて冷たかった。ティレケラトネは、自分の姉妹とは仲よくしていたし、その教師を慕ってもいたが、兄は嫌っていた。兄は、ティレケラトネには不親切で、冷酷とも言えるほどの態度を示していたようである。

前世の家族に対して子どもがその後どのような態度や行動を取るかは、その家族が本人をどう受けとめるかによってある程度決まる。一部の事例では、子どもが前世の家族から完全に受け入れられる。こうした事例では、遊びに来るよう本人を誘ったり、贈り物をしたり、さらにはもっと実際的な援助を行なうのである。一方、前世の家族が子どもを拒絶する事例もある。こうした場合には、最初の訪問が最後となる。前世の家族が子どもの家族よりもはるかに裕福で、そのため子どもの家族が自分たちから金品を騙し取ろうとしているのではないかと(私の経験では、そう考えてよい正当な理由もないのに)思い込んでいる場合、このような事態がよく発生する。(またたいていは、そのような時にしかこうした事態は発生しない。)その後の状況を観察できた事例では大半が、二、三年の間は双方の家族が親しく行き来し合うが、その後は、双方の生活形態が変わるに従って交際が少なくなったのである。

もうひとつの変わった行動とは、家族の中では異質であるが、前世の人格が持っていたことがわかっている、あるいは持っていたと考えてまちがいない行動特徴とは一致する(恐怖症、嗜好、関心、技能などの)行動特性のことである。こうした事例では、子どもの家族に同じような特徴を示す者がいないか、いてもはるかにその程度弱いので、そのような特徴が子どもに出現した原因を、それまで子どもが経験して来た出来事に求めることはできない。

前世の人格の死因に関係する恐怖症は、私には特に印象深かった。しかも、このような事例は頻繁に見られるのである。前世の人格が横死を遂げた252例中127例(50パーセント)に恐怖症があることが判明しているのである。前世の人格が溺死している場合には、水に対する恐怖症を示しやすいし、射殺されている場合は、銃火器に対する恐怖症が起りやすい。

恐怖症を持つ子どもは、原因となる刺激が一般化されたような反応を示すことが少なくない。たとえば、理髪師に殺された記憶を持つラヴィ・シャンカール・グプタは、(本人の幼少期にはまだ近くに住んでいた)前世の人格の殺害犯である理髪師に対してばかりでなく、どの理髪師に対しても恐怖症を示したのである。ハサンという人物に殺さ

れた男性の生涯を記憶している(カン・ポラトが調査した)トルコの子どもは、(トルコにはかなり多い)ハサンという名前の人全員に対して恐怖症を示した。

言葉を覚える前、したがって前世での恐怖症の原因らしきものを説明できるようになる以前に恐怖症を示す子どももある。シャムリニー・プレマの事例を要約して紹介する中で触れておいたが、シャムリニーは、生後まもなくから、母親が入浴させようとすると、水に漬けられることに対して極度の恐怖を示した。シャムリニーは、口が利けるようになると、前世で溺死した時の模様を詳しく語った。ラル・ジャヤスーリアというスリランカの少年の事例でも同様の現象が見られた。この少年は、言葉が話せるようになる前から、警官の姿を見ると明らかな反応を示し、できるだけ姿を隠そうとしたのである。その後、自分は前世で反政府運動家だったと語ったのである。(スリランカで1971年に起こった反政府暴動は、警官当局の不必要な武力介入により鎮圧された。)

特定の食物を好むこと(および、特定の食物を嫌うこと)も、こうした子どもたちが示す変わった行動のかなりの部分を占める。前に述べたように、ボンクチ・プロムシンは粘り気のある米飯を好んだ。(というか、非常に食べたがった。)このような米飯は、本人の家族は振り向きもしなかったけれども、ボンクチが前世の自分だというチャムラットという青年の好物だったのである。

個々に見れば、こうした行動には特別の意味を持つものはほとんどない。このような行動を示す者は子どもにもおとなにも大勢いるからである。しかしながら、全体として見れば、このような行動は印象的なものとなる。こうした子どもたちは、家族の中では異質であるが、前世の人格の特徴であった行動の症候群を示すことが少なくないからである。次に紹介する実例をお読みになれば、このような意味での変わった行動群が具体的におわかりいただけよう。マ・ティン・アウン・ミヨは、男性的な行動特徴や飛行機恐怖症、数種の“日本人的”行動を示したうえ、戦争ごっこを好んだし、スジト・ラクマル・ジャヤラトネは、幼時に、酒や煙草を異常にほしがり、トラックや警官に対する恐怖症を見せた。また、シャムリニー・プレマは、特定の食物を異常とも思えるほど好んだことに加え、水に漬けられることやバスに対する恐怖症を示したし、エルカン・キリヒ(トルコ)は、飛行機恐怖症やアルコールに対する嗜好を示したうえ、ナイトクラブ経営ごっこという遊びも演じた。こうした行動群はすべて、それぞれの前世の人格の行動と符号していたのである。

さまざまな文化圏で報告される事例の発生率に違いが見られること

報告される事例の発生率についてはわかっているものの、実際の発生率についてはほとんどわかっていない。その点については既に指摘している通りである。とはいえる、報告された事例群の中ですら、文化圏によって大きな差が見られるのがわかる。また、生まれ変わり信仰を持つ文化圏の方が、持たない文化圏よりもはるかに多くの事例が報告されているという事実についても先に述べておいた。この点について疑念を持たれる方は、レバノンのイスラム教ドゥルーズ派の信者の間には生まれ変わり型

事例が多発するのに対して、近隣の村に住むやはりレバノンのキリスト教徒の間では稀であるし、ドゥルーズ派の信者とキリスト教徒が隣合って暮らしている村の中すらレバノン人やキリスト教徒には稀である(私に言わせれば、ほとんどない)という事実をお考えいただきたい。スリランカのキリスト教徒と仏教徒の間にも、インドのヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間にも、報告される事例の発生率に同様の差が見られる。インドのイスラム教徒の間でも(レバノンやスリランカのキリスト教徒でも時おり見られるように)生まれ変わり型事例は発生するが、きわめて稀なのである。

このような差異が生ずる理由を最も端的に説明してくれるのは、文化圏によって生まれ変わり型事例の発現しやすさが異なるとする考え方である。私もこの考え方に対するものである。生まれ変わりの可能性を両親が信じていれば、子どもが前世の話をしても、気が違ったとは思わず話させておくからである。しかしながら、文化的影響によって事例が発現しやすくするとすれば、逆に同じくらい抑制される可能性もあるので、東南アジアや西アジアの一部や西アフリカでなぜこれほど多くの事例が発生するのか、という点を問題にするのであれば、同時に、ヨーロッパや北アメリカでそれほど少ないのでなぜか、という点も同じく問題にしなければならない。生まれ変わりを信じていない親は、信じている親と同じくらい自分の子どもに影響を与えるかもしれないるのである。

しかしながら、世界の一部の地域に生まれ変わり型事例を出現しやすくさせる要因は、生まれ変わり信仰の有無以外にもあるはずである。こうした要因とはいかなるものであろうか。さしあたり、私たちの知るところとなった事例に対する影響力が世界各地での実際の発生率にはほぼ比例していると仮定すると、生まれ変わりの信仰の有無と事例の発生率との間に単純な相関があると考えたのでは、発生率に差が見られるという事実が説明できない。考慮すべき要因が他になかったとすると、平均的に言って人口の20パーセント以上が生まれ変わりを信じている西洋諸国では、現在よりもはるかに高い発生率が見込まれるはずである。アジアより西洋の方が、抑え付けられた事例が多いと私は見ているけれども、西洋では、アジアよりもはるかに発生率が低いという事実が、より抑制が強いとしただけで説明できるとは思われない。(インドでは25パーセントほどの事例が抑え付けられているのがわかっているが、それでも数多くの事例が観察されるのである。)

したがって、こうした事例が多数見つかる国や文化圏には、事例の発現を促す重要な要因が他にあると考えざるをえない。おそらくは次のような要因が関係しているのであろう。

生まれ変わり型事例が頻繁する民族には(一般に)、次のような特徴が(生まれ変わり信仰の他に)存在している。

- 1 故人の想い出を、西洋の人間よりも深く心に留めている。故人は依然として活動を続けており、この世の出来事に介入することができるとされる。また、死者は生者の助けを、生者は死者の助けを必要とするとも考えられている。
- 2 また、生者に対する思いも、西洋の人間より強い。家族の絆は、西洋人と比べて強固で拘束力も強い。家族の誰かが精神病になると、家族の者は、患者と一緒になっ

てその病気に立ち向かう。それに対して西洋では、精神病患者の家族は患者を身内扱いしなくなる傾向がある。驚くには当たらないが、たとえば、精神分裂病のような重症の精神病の回復率(および回復した状態でいる期間)は、工業先進国よりも発展途上国の方に際立って高いのである。現代の西洋人が発展途上国を訪れてしばしば仰天する腐敗状態を家族的協力のひとつの表われと見なすこともできるかもしれない。腐敗から脱却し、たとえば地域社会や国家といったさらに大きな集団に従属するようになると、家族の絆は弱まるかもしれない。

- 3 こうした民族の持つ因果律の概念には、西洋の因果律よりもはるかに多くの内容が盛り込まれている。“偶然”や“幸運”や“無作為性”といった西洋の考え方には相当するものは存在しない。何か起こったとすれば、それは必ず、(悪人であれ善人であれ)誰かがその出来事を起こそうとしたか、そういうことが起こってもよいと考えたためなのである。このことは、特に病気に当てはまる。古来の伝統を汲む治療師やシャーマンは、病気になったのは運が悪かったからだとか、偶然にすぎないなどと言ったとすれば、たちまち患者が来なくなってしまうであろう。このような治療師は必ず病気を、業が深いためであるとか、先祖の供養の仕方がまちがっているためであるとか、本人を妬む者が悪霊を呼び出したためであるなど、人間が関係する理由を持ち出し、偶然のためとは言わないでのある。
- 4 遠く離れた者同士でも交信が可能だと信ずる度合は、西洋人よりも高い。たとえば、西洋の人間が超常的と考えるテレパシーなどの体験については、珍しいといえ通常の出来事の範疇に含まれる。また、夢を、事実を伝えるものと見ることが多く、生者は夢の中で時おり故人と再会できると信じている。このような国では、西洋的なプライバシーという概念はほとんど発達しなかった。それは、そのような選択をしたというよりは貧困や過密のためなのかもしれない。もしそうだとしても、日々の行動から他人が締め出せないとすれば、他者が五感を介すことなく自分の心の中に侵入して来るテレパシー的交信を受けやすくなるであろう。
- 5 言葉の上手下手を、西洋人ほど重視していない。そのおかげで、西洋人よりもイメージを保持する能力が高い。
- 6 時間の流れが西洋とは異なる。西洋人からすると、アジア人やアフリカ人の“時間の観念”的欠如は腹立たしく見えるかもしれないが、逆にアジア人やアフリカ人の眼には、時計に縛り付けられている西洋人の几帳面さは哀れに映るかもしれないのである。
- 7 このような民族の間では、西洋と比較して、しなければならないことが少ないか、そこまでいかずとも四六時中何かしていなければならにという感じは弱い。そのため、過去を振り返る時間が西洋よりも長くなり、現世はもちろん、記憶に残されている前世の生活も、意識に昇りやすくなるのである。

以上の要因は、私たち西洋に住む者が超常的と考える(前世の記憶ばかりでなく、テレパシー的印象やポルターガイスト、靈姿などを含む)さまざまな体験を起こしやすくするもののように思われる。私は、昔の純真さが失われてしまったことを嘆く者ではないが、このような相違点に思いを致す者は誰でも、西洋は技術文明を発達させる過程で、得るものがあった代わりに失うものもあったのではないか、と自問すべきで

ある。

世界の一部の地域でこの種の事例が多発する事実の説明となる肝腎な要因を私は特定しなかったかもしれない。読者諸賢の中には、他にもそれらしき特徴をお考えになっている方もある。報告される事例の発生率が各国で異なるという事実を、生まれ変わり信仰の有無だけで十分説明できるとしてあっさり片付けることはできないわけであるが、その点がおわかりいただけたとすれば、私としては満足である。このような差を生じさせる原因については、明らかにすべき点がもっとあるはずである。

しかしながら、私が重要だとして挙げた特徴が正しく説明できているとすれば、生まれ変わり信仰のみでは不十分なのと同様、こうした特徴も、前世の記憶を持つ子どもを多数出現させる要因として不十分である。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの広大な地域では、そこに住む人たちのほとんどに先述のような信仰や態度が見られるにもかかわらず、生まれ変わり型事例がほとんど見つからないからである。とはいえ、そこに住む人々は生まれ変わりを信じているわけではない。イスラム教逊ニー派やキリスト教徒の間では正統な教義になっていないからである。要するに、こうした事例が多発するためには、生まれ変わり信仰とそれ以外の要因の両方が必要らしいということである。いずれにしても一方だけでは、多数の事例を発現させる条件としては不十分なのである。

選択可能な胎児の中から選び出すという可能性

これまで述べたように、双方の家族の間には、個人的地理的な結び付きが見られる場合が多いが、そのことからすると、生まれ変わろうとしている肉体のない人格は、愛情や友情によってその家族と前世で結び付きがあったためか、先述のような地理的要因のため、特定の家族に(おそらくは強く)引き付けられるらしいことがわかる。肉体のない人格と両親となるべき夫婦との間に引き合う力があるとすれば、生まれ変わろうとする人格は、大半の場合、両親が提供する胎児は何であれ引き受けざるをえない立場に置かれているように思われる。この点、帽子とそれを被る者というマクタガートのアナロジーは役に立たないことがわかる。どの夫婦にしても、生まれ変わろうとしている者の求めに応じられる範囲はわずかだからである。ほとんどの夫婦は、帽子屋が客に提供できるほど多様な胎児を用意することはできない。肉体を持たない人物が、医学用語を使えば、主としてあるいは全面的に疾病産生遺伝子によるハンチントン舞踏病や鎌状赤血球貧血、血友病などの病気を持つ家族にいわば強く引き付けられるとすると、その人物は、そうした遺伝子を持つ肉体に一か八か掛けてみなければならないことになろう。もし、たとえばある人物が、血友病の遺伝子を持っている女性の息子として生まれ変わるとすると、生まれて来た子どもが血友病を持っている確率は $1/2$ になる。(このような母親からでも、半数は血友病を発病する遺伝子を持たない子どもが生まれるのである。)

ひとたび両親となる夫婦を決めてしまうと、肉体の選択と言ってみても、生まれ変わりつつある平均的な人間にはどうすることもできない、と私は思っているけれども、ある種の選択過程の介在をうかがわせる事例も時おり見られる。こうした証拠は、性転換や双生児の事例に見出される。

性転換型の事例は、この問題を検討するうえで最良のデータを提供してくれる。ある

人物が、今度生まれ変わる時には今とは違う性別になりたい、という願望を生前に表明したとしよう。胚および、(胚が発育した)胎児の性別は、卵子を受精する精子の性染色体によって決定される。その精子がY染色体を持っている時には、胚の性別は男性となり、X染色体の時には女性となる。父親の精子は、半数がY染色体を、半数がX染色体を持っているので、どの胚にしても、男性及び女性となる確率はそれぞれ50パーセントずつのはずである。このような状況の中で、肉体を持たない人格は、次のいずれかの方法により、希望する性別の胚と結び付くのであろう。つまり、肉体のない人格は、自分の望む性別にしてくれる精子を、受精を待つ卵子の方へと誘導する一方、逆の性染色体を持った精子が卵子に近づかないようにすることができるのかもしれないし、希望する性別の受精卵(および初期の胚)ができるまで、逆の性別の受精卵や胚を排出させるよう仕向けることもできるのかもしれない。

性交が排卵の一日ないし数日前に行なわれた場合には、排卵当日に行なわれる時よりも男児を妊娠しやすい。(しかしながら、人口受精の場合には、その逆になる。)Y染色体を持った精子はX染色体を伴った精子よりも活動性が高いが、精子が進む体液の粘稠性その他の特性によって、この利点が減じられたり、消失したりするかもしれない。受精を迎える女性の体に生理学的な変化が起こると、二種類の精子の侵入力はそれによってそれぞれ異なった影響を受ける可能性がある。肉体のない人格は、自分の母親になるかもしれない女性に対して、テレパシーにより影響を与え、男性の受精卵になる確率を高めたり低めたりするような精神身体的変化を起こすのかもしれない。とはいえ、この方法は、次に結び付く肉体の性別を確実に決めるうえでは、当てにならない方法のように思われる。

次にありそうな可能性としては、受精卵の多くが次の生理の際に排出されてしまうか、予定日の少し後に流産してしまうことが考えられる。この場合、当の女性は流産に全く気づかず、生理がいつもより遅れて量も多かった、としか思わないかもしれない。肉体を持たない人格は、今度生まれ変わる時になりたい性別の胚ができるまで、このようにして早い時期に受精卵を排出させてしまうのかもしれない。そして、希望する性別の胚ができると、発育を続けさせるのではなかろうか。

平均すると、受精卵の(ほぼ)半数は男性、半数は女性なので、肉体を持たない人格は、性転換をおこす予定の時もそうではない時も、受精卵の性別を監視している必要がある。性転換を起こす予定のない時も監視していなければならぬという点は重要である。現在手元に集まっている事例から判断できる限り、性転換は、発生率が比較的高い国ですら珍しい(たとえばビルマでも28パーセントにすぎない)うえに、レバノンやトルコなどの国では全く発生しないからである。したがって、性転換を起こそうとする時よりも、回避しようとする時の方が監視が必要になるはずである。

特定の性別の受精卵を作り出すのに必要な精子と卵子と受精させることに失敗し、しかもその受精卵を流産させることもできなかったとしても、肉体のない人格は、第三の方法を用いて新しい肉体の性別を操作することができるかもしれない。つまり、希望する性別の受精卵が母親の子宮内で発育するまで待ち、その胎児と結び付くという方法である。このようなことが起こる可能性をうかがわせてくれる事例も若干ある。それは、死んだ子どもの両親が、もう一度自分たちのところへその子が戻って来てほ

しいと希う事例である。その子どもがはっきりした母斑や傷痕を持っていれば、あるいは両親が(アフリカやアジアで一部行なわれているように)子どもの遺体に印を付けたり手足を切断したりしていれば、その後生まれた子どもの体にそれと一致する母斑や先天的欠損があるかどうかを調べるであろう。そして、生まれて来た子どもにそういった身元証明になるものがあれば、死んだ子どもの生まれ変わりだと考えることであろう。母斑や傷痕を持っていた子どもが死亡してから、その生まれ変わりとされる子どもが生まれるまでの間に、他にも子どもが生まれる場合もある。このような間に生まれた子どもたちは、死んだ子どもとその生まれ変わりと目される子どもとは(必ずしもそうとは限らないが)時おり性別が異なっている。このことからすると、生まれ変わろうとする人格は、性別に対する執着が強く、同じ性別の肉体が手に入るまで何とかして待ち続けているらしいことがわかる。とはいえ、この群に属する(性別という点でどうやらもっと柔軟な考え方を取っているらしい)他の子どもたちは、それまでとは逆の性別の肉体で生まれ変わったように思われる所以である。

肉体のない人格が自分の母親になりそうな女性に影響を与えることができるかどうかという問題については、確固たる知識を出発点として論を進めるこてができる。少なくとも私たちは、心理的事象が女性の生殖器系の機能に大きな影響を与えることがあるという事実を承知している。ストレスを受けた結果、生理の時期が多少なりとも変動したという経験のない女性がいるものであろうか。そのような女性が存在すると思われないけれども、心理的出来事によって、女性の生殖器官には、生理が遅れたり飛んだりすること以上にさまざまな変化が起こりうる。こうした影響が極端な形で現われるのは、偽妊娠すなわち想像妊娠の時である。本当は違うのに妊娠したという思い込み、この状態に陥った女性は、妊娠したという思い込みが続く間、長期にわたって生理が止まることもある。さらには、腹部や乳房が大きくなり、生殖に関係するホルモンに変化が生ずることすらあるのである。こうした身体的变化は、その女性が最終的に、自分は妊娠していないことを——何ヵ月もたった後の場合が多いが——気づかされると、そのとたんにすべて消失する。

受精能力を持つ女性でも、心理的要因によって妊娠が起らなくなることを示す証拠もある程度存在する。不妊と思っている女性でも、養子を迎えると妊娠することが少なくない。このような事実からすると、その女性(およびその夫)は、本人(ないしはふたり)の受精能力に影響を与えていた、子どもを持つことに対するある種の心理的抵抗を乗り越えたらしいことがわかる。トロブリアンド諸島に住む民族は、自由に婚前交渉を行なうが、婚前の妊娠は忌み嫌う。この民族は物理的な避妊法を全く用いないし、妊娠中絶も稀ないしは皆無である。それでいながらトロブリアンド諸島の人たちの間では、結婚する前に妊娠する比率がきわめて少ない。以上のような事実からすると、この地域に住む未婚女性の妊娠は、精神身体的プロセスによって抑制されているらしいことがわかる。

心理的要因が生殖器機能に影響を及ぼすことを裏付けるもうひとつの証拠は、卵子が受精前に“過熱”するという現象の研究に基づいたものである。これが先天的欠損を引き起こす要因のひとつになっているのかもしれない。そして、心理的ストレスが、卵子の過熱を生じさせる原因のひとつになっているように思われる。

これまで述べてきたような変化を起こすのに必要な程度まで、肉体のない人格が未来の母親ないし精子および接合体に直接影響を与えることがありうるかどうかについても、やはり考えてみなければならない。妊娠を切望したり忌避したりする時に起こる現象に關係した先述の証拠からすると(あまり強力な証拠ではないことは確かであるが)、肉体のない人格は母親の身体的状態に影響を与える可能性があることがわかる。心靈研究の歴史をひもといてみても、肉体のない人格が、自分の死ぬ時に体験した身体症状を靈媒を通して出現させた例がいくつかあることがわかる。もし肉体のない人格が、女性の体に、以上の例から示唆されるような影響を及ぼすことができるとすれば、女性の体内にある接合体や胚をそのまま成長させるように、あるいは逆に流し去るようにすることができるのではないか、と考えてもそれほど無理はないように思われる。